

ブランディング論
ロゴタイプ
実践編

英字の基本

大きさのバランス

下図①は、ヨコ4×タテ5のスペースに、線幅を1として、H.A.O.E.Dの5文字を幾何学的に書いたもの。これらを観察すると、まず大きさにかかなりのバラツキが感じられる。またタテ線に比べてヨコ線はかなり太く感じ、Oは他の4文字の天地幅より小さく感じられる。Aは上部の線のクロス部の黒みが強すぎる。など図形としての統一感に欠けていることに気づくであろう。図②は、それらを書体としての統一感、そろった美しさが感じられるように視覚修正したもの。

このように英字は、フォルムが単純で、一見そのレタリングは容易に見られがちだが、視覚的にバランスを整えた美しい文字にするためには、細かな神経が要求される。日本字と違って、英字はラインの設定はあるものの、IとWのように一見して字幅の違いがわかるようなものは別としても、文字によって字幅を変えねばならない。ここでは、この基本の5字をキャピタルハイト80~100 μ mに大きく書いて細かく測定するとよい。

①ヨコ4：タテ5のワクの中に線幅を1として幾何学的に書いたもの。

H A O E D

②上のH幅を基準に、大きさ、太さ、ウェット(黒み)、重心などを視覚調整したもの。

H A O E D

〈ラインシステム〉

③英字の基本的ラインシステム



英字はラインシステムによって形成されている。大文字、小文字ともに並ぶ線がベースライン。大文字の上のラインはキャピタルライン。大文字は、ほぼこのライン内に納まる。小文字は、各文字に共通なボディーを示すラインがウェストライン（ボディライン、ミーンラインともいう）。これを中心に上下に出っぺりがあるものがある。上の出っぺりはアッセンダーといい、下の出っぺりはディッセンダーという。大文字の高さは、ベースラインからキャピタルラインまでの高さで示し、キャピタルハイトと呼ぶ。小文字は、ベースラインからウェストラインまでの高さで示し、Xハイトと呼ぶ。本来、アッセンダーラインは、キャピタルラインより高いのがふつうであったが（図4参照）、最近の書体は、同一ラインとしているものが多い。

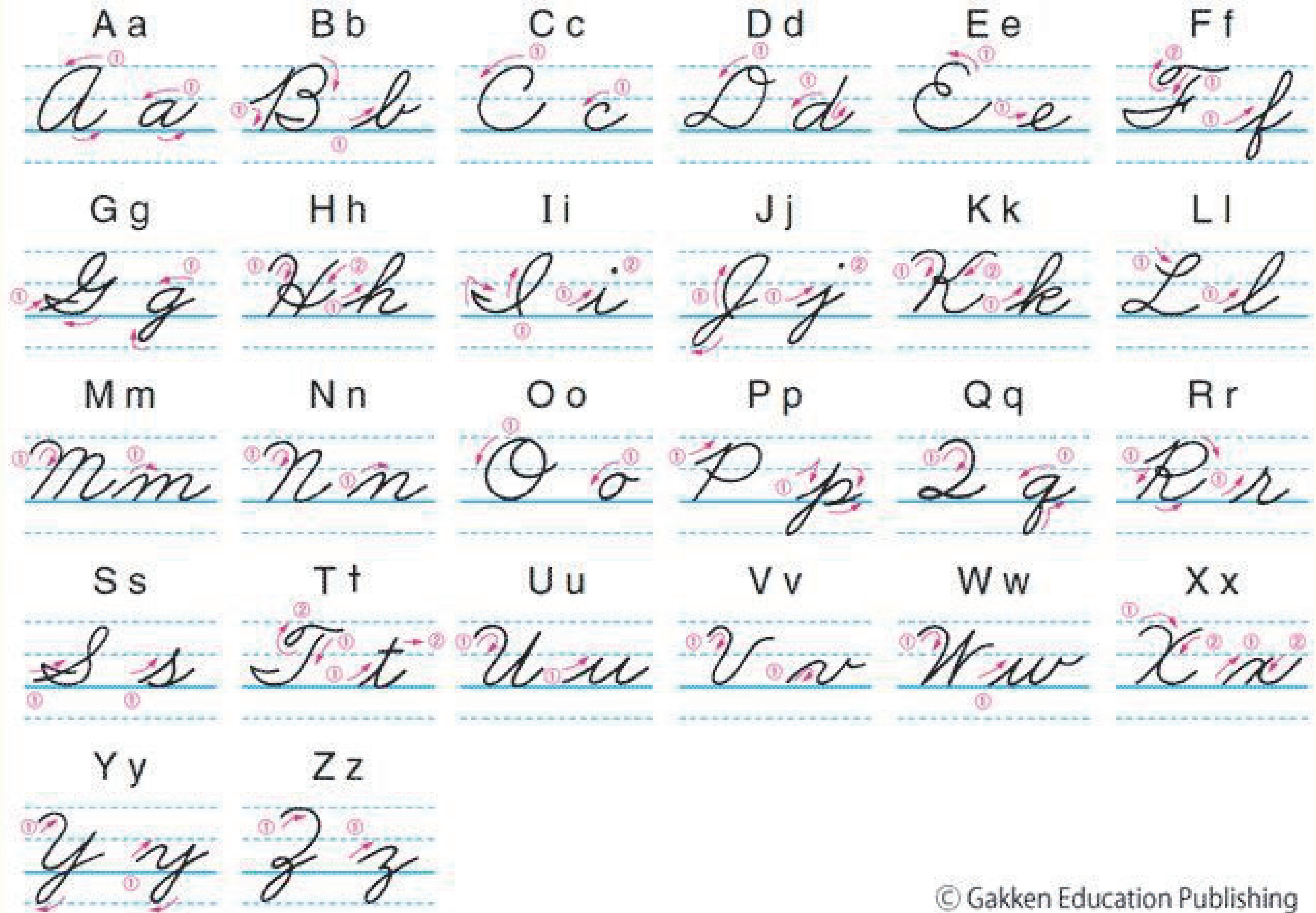
●特殊な設計の書体を除いて、最近の書体、特にサンセリフではほとんどが、アッセンダーラインとキャピタルラインを一致させている。またローマン系の書体でも、かなりの書体について、同様のことがいえるようだ。もっとも、オールド・ローマン系の書体では、いまだにアッセンダーラインを高くした書体が多く、また一般的である。

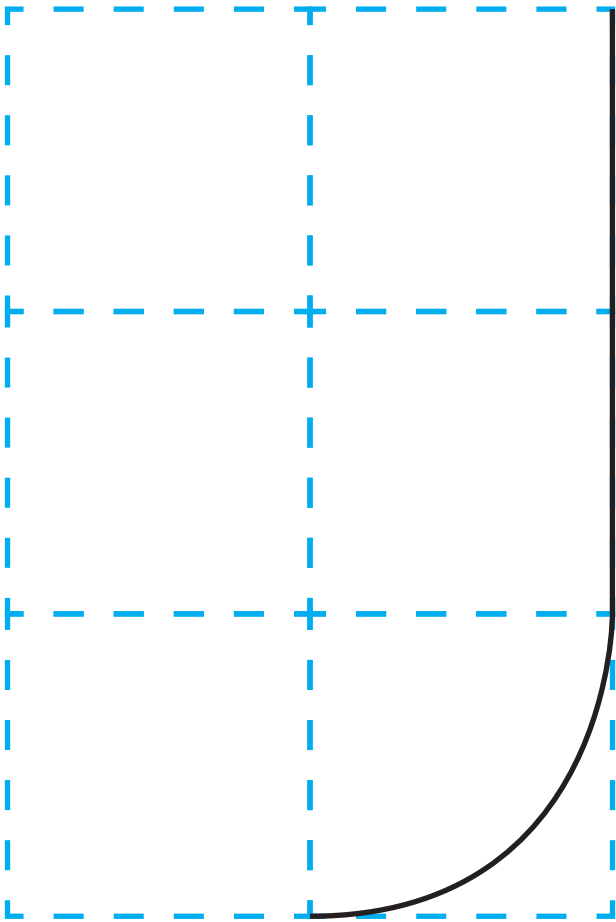
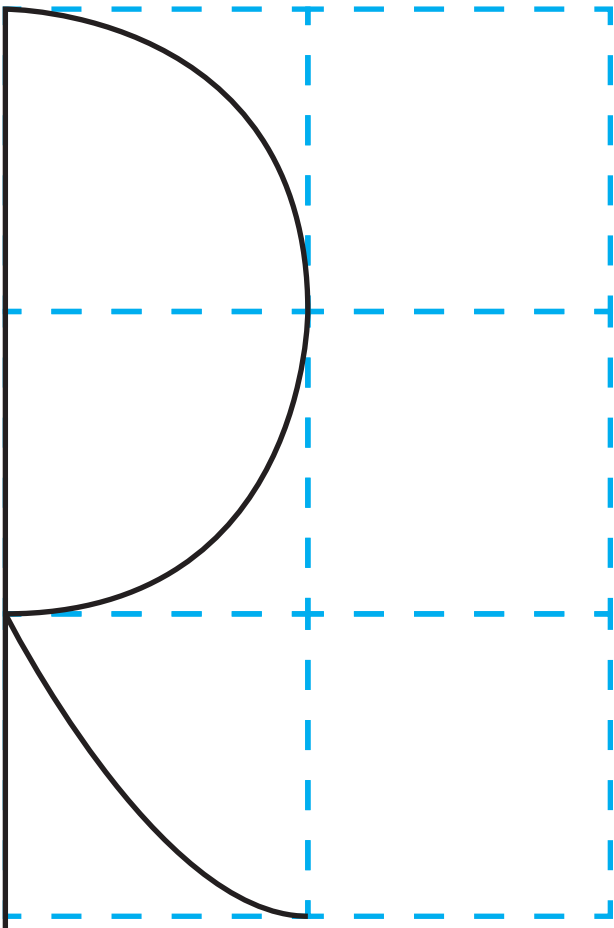
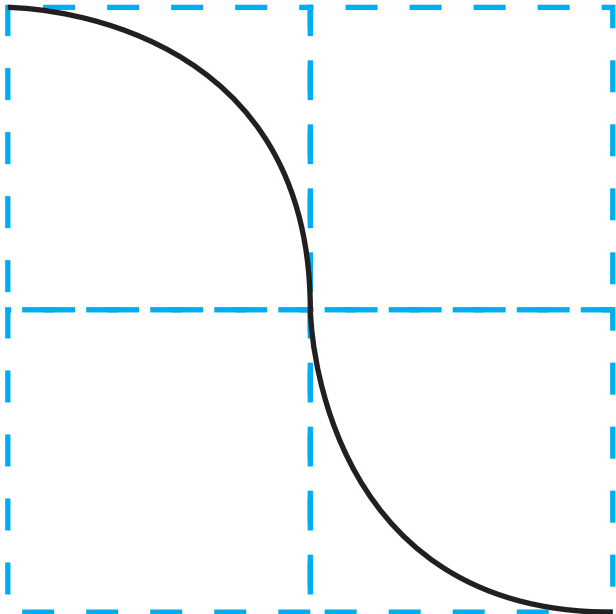
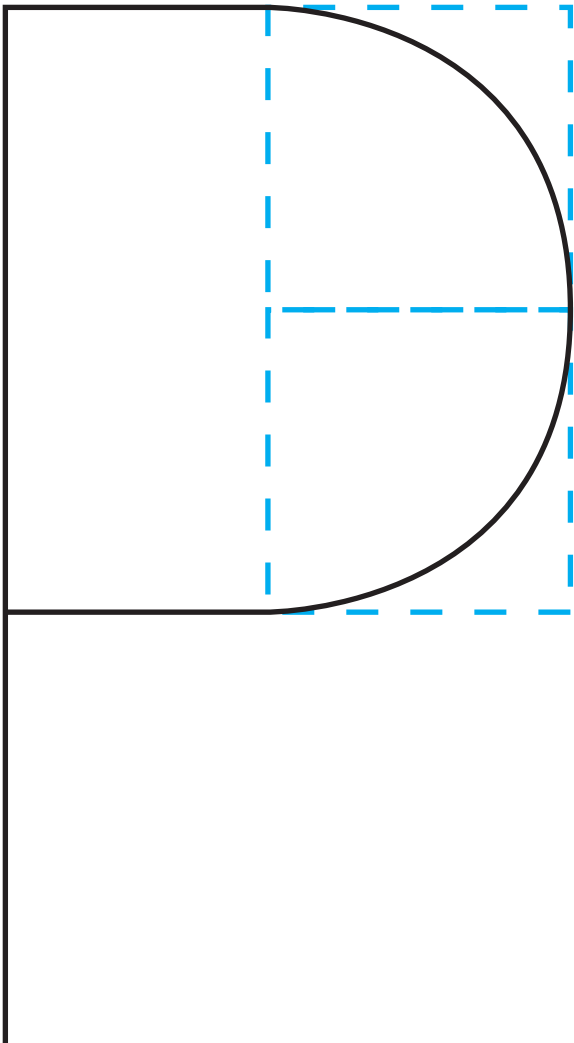
④キャピタル・ラインより、アッセンダー・ラインが高い書体の例。

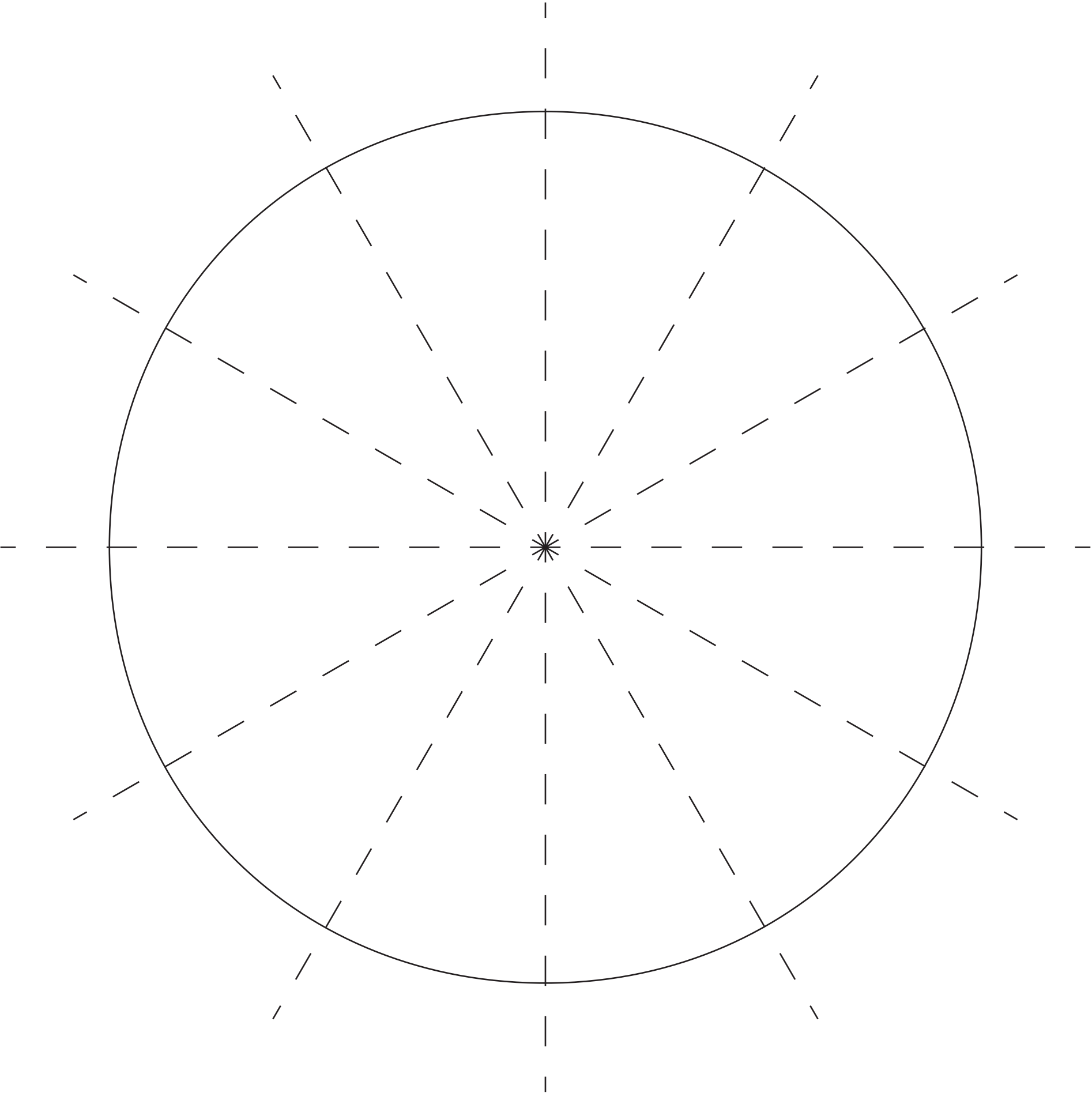
H B F f h k

⑤キャピタル・ラインとアッセンダーラインが同じ位置の書体の例。

H B F f h k









SUNTORY

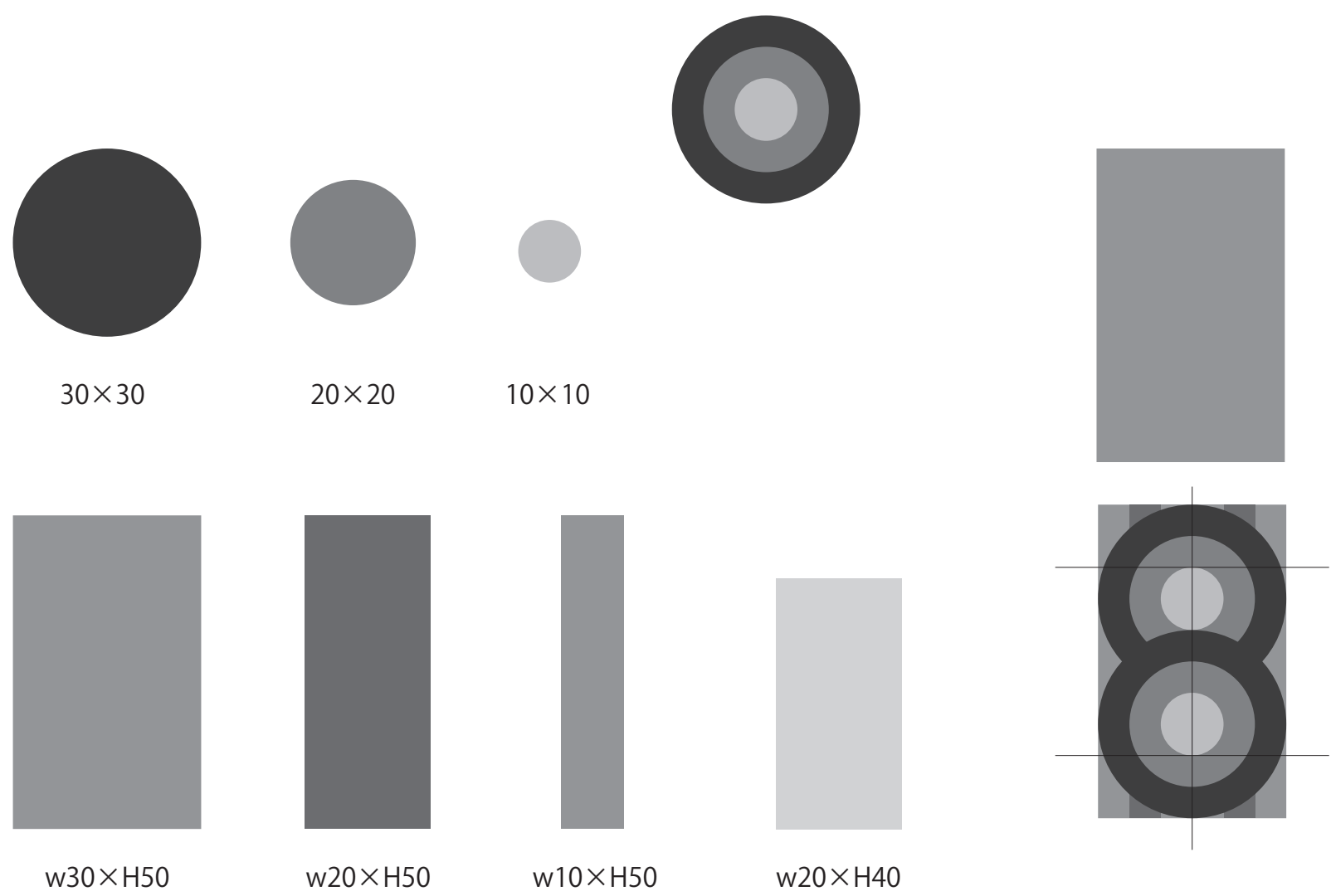
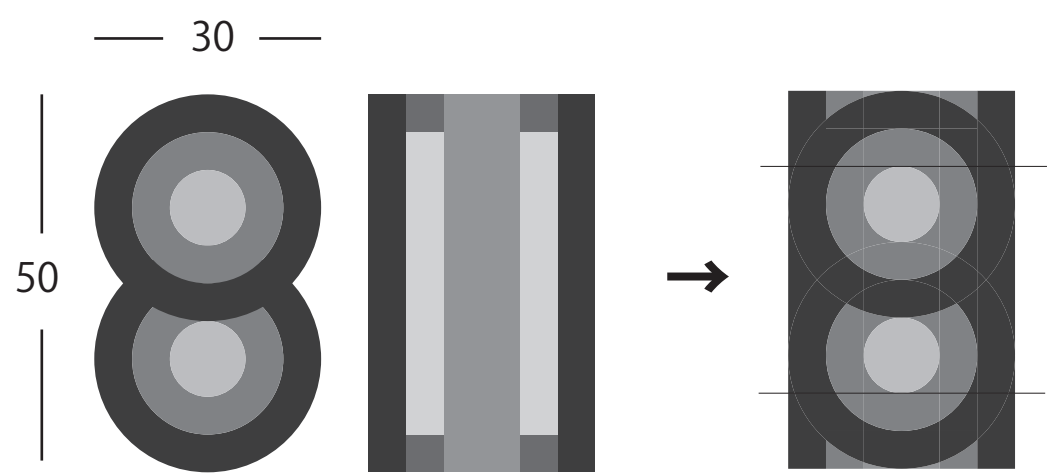
簡単なベジェ曲線。

japan



japan

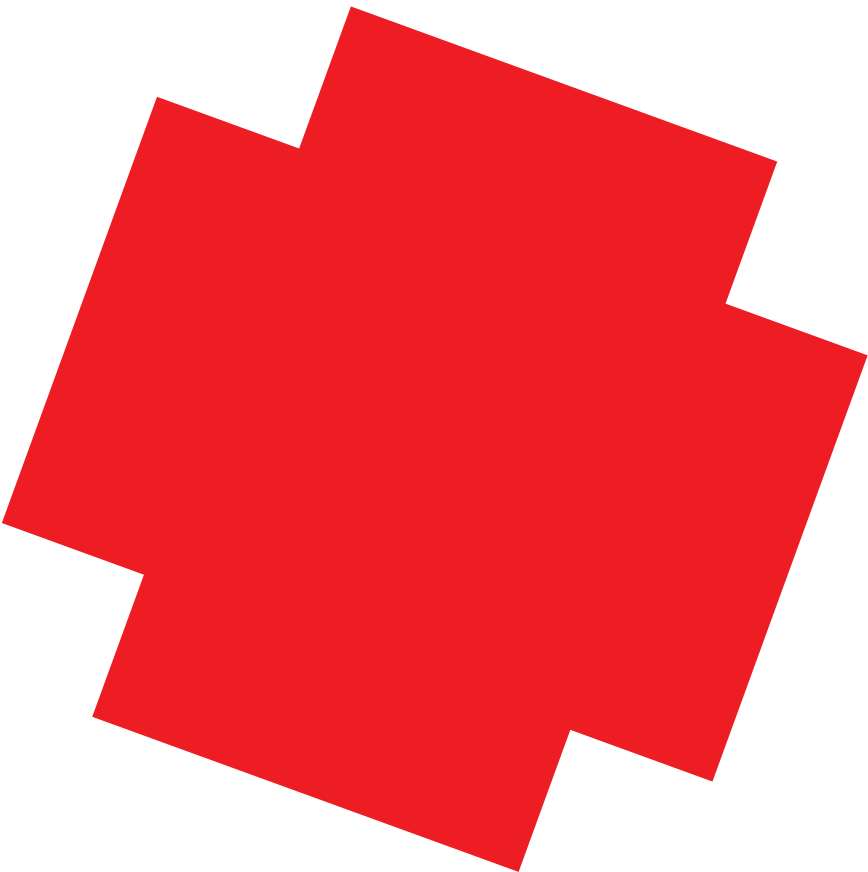
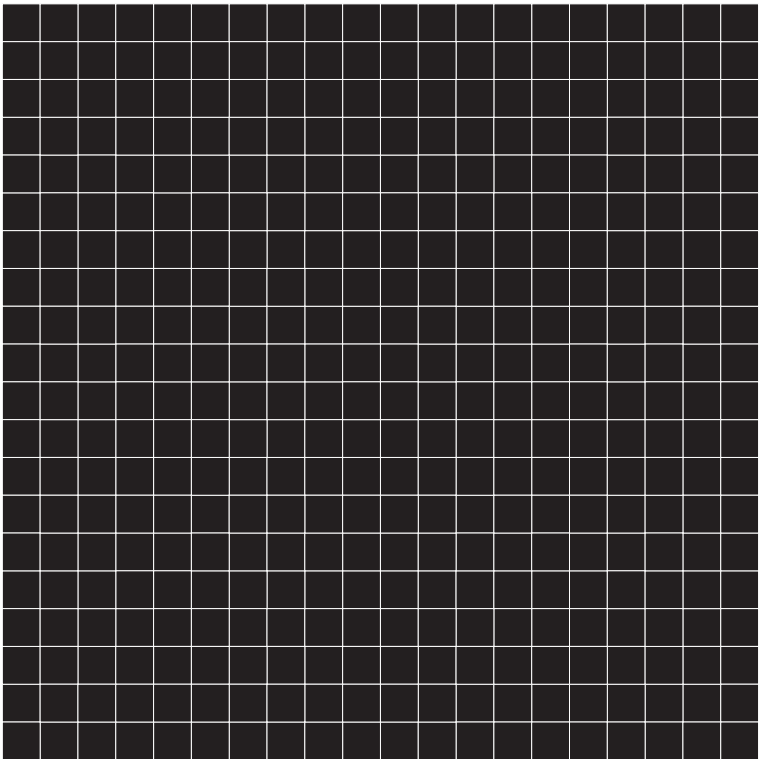
②あらかじめ落としどころを想定した作字。

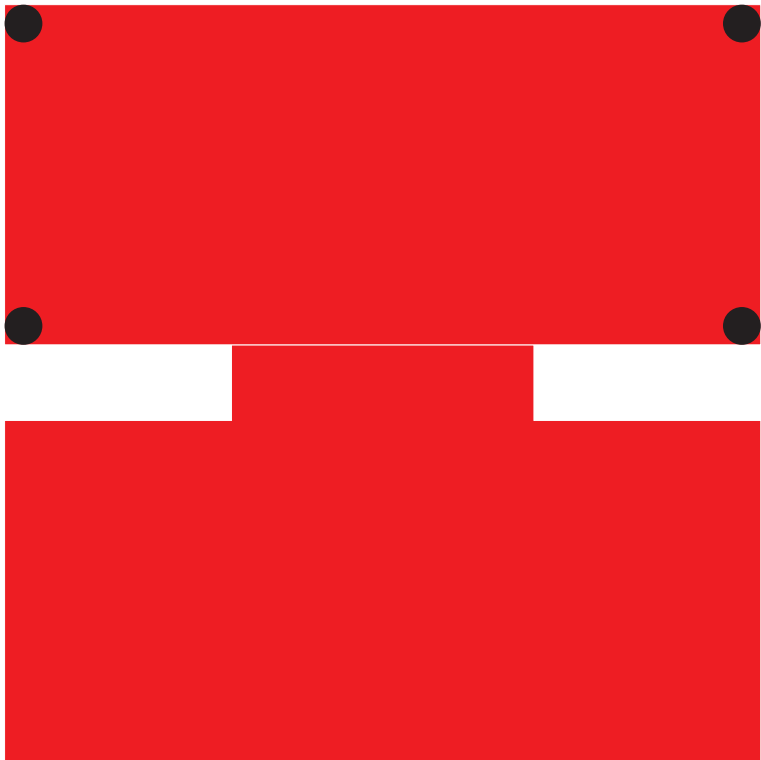


日本語について

スペースをいっぱい使用した作字

100×100 を 20×20 の正方形で構成





①通常のフォントを加工し、縦横比を変えてみるやり方。

14
15 山 王 ホ テ ル
18 山 王 ホ テ ル

山 王 ホ テ ル
山 王 ホ テ ル

今 治 国 際 ホ テ ル

エレメントをまもりながら作っていく方法。
このエレメントを使って「道の駅清流の里ひじかわ」を制作してみよう。



面の輪郭で構成した文字なのか線で表現した文字なのか分からないところが個性を創出している。
また、「私」の文字のようにどちらが側が外でどちら側が内か困惑しそうなギミックを使いオリジナリティを作り出している。デザインの表現においてはオリジナルなものは大事な要素なので習得して欲しい。

【問題】「東京スカイツリー」の文字を下記のようなギミック（仕掛け）を使って表現しよう。

エ 巨 ✂ 窓 0 リ シ

私 は 今